

学術研究情報センター

研究推進局

ICTテクノポリス研究所	所長 / 神谷幸宏
次世代ロボット研究所	所長 / 村上和人
生涯発達研究所	所長 / 三山 岳
多文化共生研究所	所長 / 小池康弘
人間の尊厳と平和のための人文社会研究所	所長 / 洲脇武志
"まもるよちいさないのち!" 地域災害弱者対策研究所	所長 / 清水宣明
地域コミュニティにおける高齢者の介護予防・孤立防止を目的としたニューノーマルな時代の「遊び」開発プロジェクト	リーダー / 奥田隆史



研究所・プロジェクト
チーム紹介動画



愛知県立大学
研究推進局



愛知県立大学
全学Twitter

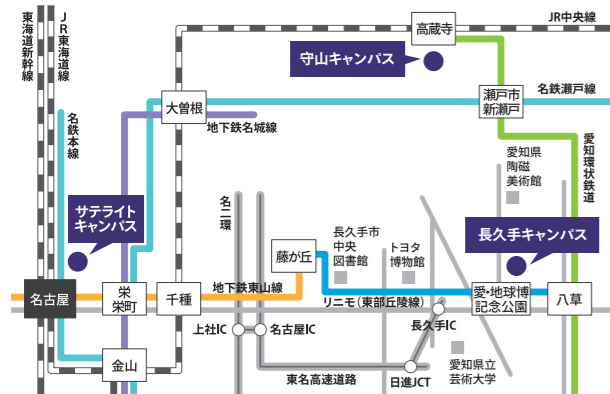


お問い合わせ

愛知県立大学 学術研究情報センター
<https://www.bur.aichi-pu.ac.jp/gakujiyo/>
〒480-1198 愛知県長久手市茨ヶ廻間1522番3
TEL 0561-76-8843
Eメール kenkyu@bur.aichi-pu.ac.jp

交通アクセス

- 長久手キャンパス
リニモ「愛・地球博記念公園」駅下車 徒歩約3分
- 守山キャンパス
JR中央線・愛知環状鉄道「高蔵寺」駅下車
スクールバス約8分



愛知県立大学研究活動報告 2023年3月31日発行 発行・編集 / 愛知県立大学 〒480-1198 愛知県長久手市茨ヶ廻間1522番3 TEL0561-76-8843

Re:Birth 2023

in SEARCH of COLLABORATIVE RESEARCH

知の大海原へ究める研究

愛知県立大学研究活動報告

受賞記念インタビュー	1
5つの学部で輝く研究	3
外国語学部 / 日本文化学部 / 教育福祉学部 看護学部 / 情報科学部	
研究所・プロジェクトチーム紹介	5
ICTテクノポリス研究所 / 次世代ロボット研究所 / 生涯発達研究所 / 多文化共生研究所 / 人間の尊厳と平和のための人文社会研究所 / "まもるよちいさないのち!" 地域災害弱者対策研究所 / 地域コミュニティにおける高齢者の介護予防・孤立防止を 目的としたニューノーマルな時代の「遊び」開発プロジェクト	
2022年度科研費新規採択一覧 / 学長特別研究費一覧	6

時代ごとに揺れ動いてきたドイツ史を「普遍と固有」の視点で俯瞰する。



「2022年度サントリー学芸賞政治・経済部門」受賞
『ドイツ・ナショナリズム―「普遍」対「固有」の二千年史』
(中央公論新社／2021.10.25)

今野 元 (この はじめ)

外国語学部ヨーロッパ学科 教授
政治学者／博士(法学:東京大学)
Dr. phil. (Humboldt-Universität zu Berlin)

専門は欧州国際政治史、ドイツ政治思想史(マックス・ヴェーバー等)、日本近現代史。2021年フィリップ・フランツ・フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト賞受賞(独アレクサンダー・フォン・フンボルト財団・2021年)
主な著書『マックス・ヴェーバーとポーランド問題 ヴィルヘルム期ドイツ・ナショナリズム研究序説』東京大学出版会 2003/『マックス・ヴェーバー』岩波新書 2020

ナチズム前後の歴史にとらわれず、古代史から繙く。新書として大胆な視座で、一般読者層にもアプローチ。

— 受賞のご感想をお聞かせください。

今野:たいへん光栄です。と同時に、文系学問における“若手学者の賞”という位置づけからしますと、受賞時は40代ギリギリの年齢でしたので、正直驚きました(笑)。チャンスがいただけたことはとても嬉しく思っております。

— ご執筆、上梓に至った経緯は?

今野:私は主に近代史が専門で、これまではマックス・ヴェーバーはじめ個別の思想家について細かく扱った研究するというスタイルでした。しかしいつかはそれを超えていきたいと思っていたところ、2018年に政治思想学会への報告のお誘いをいただきました。今回の著書のもとになる内容を発表したところ、先輩より「新書にしてはどうか」とお声がけいただいたことがきっかけです。

— 受賞作は、西洋的価値観という「普遍」と民族の伝統や文化に根ざした「固有」の間で揺れ動いてきたドイツ・ナショナリズムの思想的変遷を、古代から二千年間にわたり貫いた視点で描かれています。執筆にあたりいちばん留意された点は?

今野:近代史では、やっぱりナチスの歴史がドイツ史を考える上で中心となり、その前史・後史という位置付けで描かれることが多くなりがちです。そこで私はあえてそこに拘らず、「ナチズム中心史観」から脱却し、“ドイツ史の俯瞰”を試みることを第一のポイントとしました。それも単なる概説ではなく、「普遍」と「固有」

というふたつの潮流の対抗関係という枠組みで全体を見るという思い切った試みで、自分なりの図式を掲げてみました。



研究の総合的集成であると同時に、新たな出会いと発見も。

— ご自身の研究において、本書はどのような位置付けになりましたか?

今野:自身の研究対象では遡っても18世紀でしたので、今回宗教改革(16世紀)やそれ以前の時代にも触れたことで、より視野も広がり、これまでやってきた研究を総合した内容となりました。

また、狭小な専門書としてではなく、一般向けのメディアである新書での出版ということも追い風になり、少々大胆に議論を展開してみたことで、これまで私の研究にあまり馴染みなかった方にも手に取っていただける好い機会になったのではないのでしょうか。

— 読者層について意識したことは?

今野:ドイツについて論じるにあたり、ヨーロッパ諸国や米国との比較、さらには日本やアジアと比較してみるなど、ドイツ以外の地域に興味を持たれている方にも手を差しのべやすい切り口も試みしています。読者をご自分の知識や関心に紐付けながら読んでいただければと思います。

学生には、ドイツ政治史の講義などのテキストとして紹介もしています。「ドイツという国は独裁的、専制政治の国だ」という印象が強かったが、実は時代によって様々な変遷があることが意外だった。新しい発見があった」という感想が多く聞かれます。

— 今後のご研究についてお聞かせください。

今野:新しいことに向き合う際、いきなりの飛躍は難しいですが、一步一步階段を上っていく方が着実に進めやすい。本書をゴールとするのではなく、1つのステップとして、ドイツ政治思想史の詳細な概説を書くなど、さらに新たなものを生み出していきたいと思っています。

— 学生へのメッセージをお願いします。

今野:今回受賞したことで新たな出会いや新たな知る世界・発想があり、とても勉強になりました。好奇心を旺盛に持ち、いろいろな人と対話し、体験を積んで自分の引き出しを増やしてください。それが職業的にも個人の生き方としても、とても大切な財産となるはずです。

10年間のフィールド調査を主軸に、独自の視座で地中海都市論を総括。



「2022年日本都市学会賞(奥井記念賞)」受賞
『地中海都市―一人と都市のコミュニケーション』
(東京大学出版会／2021.2.26)

竹中 克行 (たけなか かつゆき)

外国語学部ヨーロッパ学科 教授
地理学者
博士(学術:東京大学)／修士(理学:東京大学)

地中海都市を対象とするフィールド調査と理論研究を下敷きに、日本国内での応用的な都市研究を手掛ける。名古屋・中川運河再生運動へのかわりをきっかけに、地域の「らしさ」を可視化するための空間コード研究を提案。主な著書『地中海都市―一人と都市のコミュニケーション』(東京大学出版会、2021年)、『空間コードから共創する中川運河―「らしさ」のある都市づくり』(鹿島出版会、2016年、編著)など。

地理学の視点から多角的・多層的な調査・資料をもとに、地中海都市特有の人と都市の関わり方をクローズアップ。

— 受賞のご感想をお聞かせください。

竹中:賞と名のつくものをいただくのは今回が初めてでした。地理学、都市計画学、経済学、社会学など「都市」という共通の関心事項でつながっている様々な分野の方々が共存する『日本都市学会』ですが、そうした学際性のある組織で評価をいただいたことは、地理学会とはまた違った価値を持つと感じました。

本書も地理学の視点に基づいて書いていますが、そうした幅広い層の方々に一読いただきたいという思いもありましたので、とても嬉しく思っております。

— 研究書でありながらも、一般も含む広範な読者層へのアプローチ、また10年以上にわたるスペイン、イタリアでの丹念な現地調査・インタビュー、豊富な文献調査をもとに「地中海都市」の特性を多層的に論じられている点などが評価された点に関してはいかがですか?

竹中:あまり耳慣れない「人と都市のコミュニケーション」というサブタイトルに関心を寄せていただけたのかなど。地理学者エドワード・W・ソジャが提唱した「社会―空間弁証法」において、「人間集団であるところの社会が都市の形を作り、その都市が人間を作っていく」という理論がありますが、そこに着想を得て、やわらかい言葉・解釈として導入したのが「人と都市のコミュニケーション」です。これを鍵概念とした論に関心を寄せていただけたことは、大きな意義があったと感じています。

— 執筆にあたり留意された点は?

竹中:「人」と「物質的な空間」の両方をしっかりと見ていくこと。工学系の計画論では、物質的な都市空間＝建築物や都市のインフラづくり等を主体に論じられ、人の話もアンケートの集計などに終始しがちです。しかし、人間一人ひとり意思を持っているわけで、都市政策などを決めていく上でも、ある意味「度胸」を持って市民社会の合意形成を牽引していきける政治の役割が重要となります。

地中海都市の面白いところは「政治家がしばしば専門家でもある」という点でした。都市計画分野の助役が建築家、空間計画担当長官が地理学者であるなど、大学を中心とする専門家の世界と政治の世界が、日本と比べるとはるかにダイナミックにつながっていて、その間を行き来できる社会の仕組みがある。こうした理論や専門的な知識に裏付けながら現実の世の中を変えていこうという強い意志を持った人たちの役割を、本書ではクローズアップしました。

留学中の学生も現地調査に参加、国内では学べない事例を体験。

— ご自身の研究において、本書はどのような位置付けとなりますか?

竹中:私の研究の中心的なテーマは「都市研究」で、「地中海都市論」としてはこの本が自分にとってひとつの“総括”となりました。

— 本書を通じての学生との関わりなどはありましたか?

竹中:10年ほど前に私が窓口となり、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学(スペイン)と学術交流協定を結んだのですが、ゼミの学生が留学した機会を利用し、歴史的建造物の転用などのフィールド調査に参加してもらいました。外国語学部といっても、都市や地域の研究はやはりフィールド調査ありきですので、海外で実践できたことは学生にとっても良い経験になったと思います。

— 学生へのメッセージをお願いします。

竹中:シンクタンクなど民間の機関は研究範囲も既定されますが、その点大学は自由な環境と言えます。在学中就職のためのスキル獲得にばかり関心が集中してしまうのは、ちょっともったいないかなど。その自由さを活かし、学生の中に興味を持ってより深めたいことや大学でできない研究をとことんやってみるのも良いと思います。



外国語学部



准教授
吉田 理加
外国語学部ヨーロッパ学科

III コミュニケーション出来事と通訳

コミュニケーション(語用)は社会・文化・歴史的なコンテクストに根差した指標的出来事、「今、ここ」(オリゴ)を基点に展開し、原則的には無限の解釈可能性を秘めています。コミュニケーションでは、情報伝達のみならず、どのように「言われたか」によって、様々な「行為」がなされており、常に「言われたこと」と「なされたこと」の2つの次元で意味が生起しています。そして、参与者は自らの「フレーム」を通してその意味を解釈します。「通訳者」という参与者を介して行われるコミュニケーションの仕組みに焦点をあてて研究しています。

III メタ語用と通訳

通訳者がジレンマを感じるのは、異言語話者間のコミュニケーション(語用)において、当然視されているため明示的に語られず前提化されていることが、実は共有されていない異文化的要素である場合です。通訳者が補足説明をしなければ、十分な相互理解が成立しない可能性が高いのですが、発話されていない情報を補足して訳出すると通訳の逸脱行為として往々にして批判的に捉えられます。そのような実践(通訳を介したコミュニケーション)と意識(言語イデオロギー)の乖離を「メタ語用」などの言語人類学の理論的枠組みから考察し、通訳者の役割が言語の置き換えだけではないことを理論的に説明しようと試みています。

III 現在取り組んでいる研究

科学研究費助成事業の共同研究として多言語通訳コーパスの構築と分析や外国語話者コミュニティへのアウトリーチ手法について研究を進めています。後者は、名古屋市の無料匿名感染症検査会iTesting@Nagoyaを様々な言語話者に知ってもらうための効果的な方法を考察するものです。外国語に正確に翻訳するだけでは必要な情報がコミュニティに届かないため、信頼できる情報として外国語話者コミュニティで認知されるためにどのような手法を用いるべきかを研究しています。

日本文化学部



准教授
内記 理
日本文化学部歴史文化学科

III ガンダーラの歴史と文化の研究

これまで、古い時代に「ガンダーラ」と呼ばれた地域の歴史や文化について勉強してきました。現在の、パキスタンとアフガニスタンを跨いだ地域にあたります。インドのガンジス川流域で生まれた仏教は、マウリヤ朝のアショーカ王の時代に、インドの広範に広まりました。そして、どういふわけか、インドの西北部にあった「ガンダーラ」の辺りで、大きく繁栄の時代を迎えました。とくに、この地域で仏像が出現したことは有名です。仏教がその後東アジアへ展開していく背景には、視覚的に把握しやすい仏像がこの地域で生まれたことがありました。

III 考古学の方法論に立脚

私が研究に用いているのは、主に考古学の方法論です。つまり、文献資料に書かれた内容からではなく、考古学遺物などの物質資料からどのようなことが言えるかを検討しています。遺跡から出土した彫刻の分析、土器の分析、検出された遺構の状態等の分析から分かることは様々で、それらを総合して考えることで、同地の歴史や文化についての新しい発見があります。例えば、この地域のある遺跡の調査で大地震の痕跡が見つかりましたが、それは文献資料からは知られなかった情報です。大地震の発生が、仏像を含めた物質文化の展開に多大な影響を及ぼしたことも判明しました。

III 現在おこなっている研究

最近では、文字資料を考古学的に分析する研究に挑戦しています。つまり、古代に書かれた文字資料について、それを文献資料としてではなく、物質資料として考古学的方法論に沿って分析しようという試みです。記された内容を見るのではなく、個々の文字の形に着目して分析を進めることで、これまでの研究では得られなかった知見が得られるかもしれません。同時に、コロナ終息後の現地調査の実施に向けての準備を進めています。政治的な事情により渡航が可能な範囲は限られますが、アショーカ王や中国唐代の仏教僧玄奘とも関わりのある遺跡の調査が、今後実現するかもしれません。

教育福祉学部



准教授
野田 博也
教育福祉学部社会福祉学科

III 貧困問題とその解決策を探求する プラグマティックな調査研究

リーマンショック前後から日本でも国内の貧困問題が注目されるようになりました。一方、私が専門とする社会福祉学では貧困問題はむしろ伝統的な研究対象ですし、国際的にみても学術的な議論は盛んです。そこでは、貧困現象がどのように変化してきているのか、どのような意味で問題となるのか、その緩和・撲滅に向けてどのような政策や実践の在り方が適当なのかが探求されています。依拠する学問や専門領域によってアプローチの仕方はだいぶ異なりますが、社会福祉学では問題解決に向けたプラグマティックな側面が重視されます。

看護学部



准教授
看護学部看護学科
広瀬 会里

III 空間アセスメントの学習教材

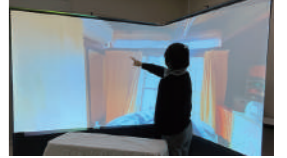
2020年度、コロナ禍で臨地実習ができず、代替に学内実習を実施しました。学習目標に合わせ臨床を再現した空間での学習は、行ったケアを振り返り、繰り返し学ぶことができ、学習成果を上げる面もありました。そこで空間をアセスメントする映像教材の研究に着手しました。映像の視聴は、複数人で一緒に視聴できるスクリーン2面への投影(様々な実習室で行えるようモバイル型とした)、学生のモバイル型端末と簡易VRゴーグルを用いた2種類の方法にしました。学生は映像を看護師の視点、患者の視点から視聴し、多角的に分析し、看護ケアを考えることができていました。

III 多学部、異なる専門領域を持つ者の協同による研究

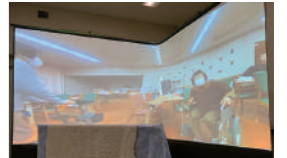
学長特別研究の助成を受け、研究を進めました。コンテンツの検討は看護学部の複数の専門領域(成人看護学、老年看護学、地域在宅・公衆衛生看護学)の研究者らで行い、映像の見せ方、映像の加工や投影は、看護学部と情報科学部の研究者と協同で進めました。目指したのは臨地に行けなくても学内もしくは自宅で、患者の置かれている状況のアセスメントができる映像教材です。模擬患者さん、在宅療養者、実習施設の協力を得て映像を作成しました。結果、コロナ禍で実習に行けない際の代替だけでなく、実習前の準備性を高めたり、実習後の復習でも活用できる教材になりました。



■ 2面投影の映像教材
ナースステーションの多職種がいる空間



在宅療養中の居住空間



認知症の人がいる空間

写真：
上段左から、天木伸子、伊藤裕子、横山加奈、石光美美子
下段左から、藤野あゆみ、広瀬会里(ここまで看護学部)、
入部百絵(情報科学部)

情報科学部



准教授
情報科学部情報科学科
小畑 建太

III 宇宙からの陸域環境モニタリング

人工衛星による地球観測データをもちいて、二酸化炭素の吸収源である陸域植生のモニタリングに関する研究を行っています。地球観測衛星は1970年代から米国を中心に運用され始め、これまで我が国を含む多くの国で運用されてきました。地球観測衛星は様々な波長の電磁波による画像を取得できますが、私は可視・近赤外～熱赤外波長域の画像データを活用しています。人工衛星に届く地球からの電磁波は、地表物(草や木など)によって異なる波長依存特性を示すことから、モデルなどを介して画像データから地表物に関する情報(樹種やバイオマスなど)を抽出することになります。

III 現在行っている研究

地表物の分布やその時間変化を正しく把握するには、情報抽出手法の正確さを高めるのに加え、利用するデータの品質も十分高く保つ必要があります。実際のところ、地表物の状態に関する解析では、ひとつの衛星による画像データだけでは十分ではなく、多くの衛星による画像データをつなぎ合わせて利用することになります。ただし、衛星ごとにセンサの性能や画像データの品質はバラバラで、簡単にはひとまとめに利用することができません。そこでこれまで、代表的な衛星群による高品質で一貫した画像データを提供するために必要な研究課題に取り組み、陸域環境観測に貢献してきました。

III 今後の人工衛星による地球観測

ここ数十年の間でも、地球上のさまざまな地域で人間活動による大規模な森林の消失、また、気温の上昇などに起因する植物生態系の変化などが報告されており、定常的かつ長期的な地球観測の重要性はより一層高まっています。近年では、より頻繁かつ詳細に地球観測を行うことができる小型衛星群や高性能気象衛星など前例のない地球観測システムが運用され始め、地球観測の新時代を迎えています。これら新たな地球観測システムが提供するビッグデータの品質と一貫性を十分なレベルまで高め、陸域植生の変化とその気候変動との関係理解に努めていきたいと思っています。

III 金融化・情報化社会における 貧困問題の変容をどう捉えるか

貧困は、その社会が容認してはいけない生活状態をより強く示す現象として理解されます。その中心的な論点は、経済的な資源の多寡にかかわります。私の主たる研究では、経済的資源、特に所得や資産の多い・少ないというよりも、その運用の過程に注目しています。具体的には、家計管理や貯金、借入、保険などの扱いが挙げられますが、それらの仕組みが金融化・情報化の影響を受けて高度化・複雑化している視点も欠かせません。これらは、海外諸国でいち早く指摘されてきた側面でもあるので、日本だけでなく様々な国・地域の動向についても調べています。

III 理論が拾えない現場の声と経験に注視する

主たる研究テーマについては、科学研究費助成事業や自治体受託研究事業として精力的に研究を進めています。これに加えて、何らかのかたちで貧困に関係している地域活動や専門機関の援助実践にも部分的であれ関わるように努めています。最近では、こども食堂や学習支援を促す民間活動、専門機関での講習・研修などが挙げられます。貧困は、経済的な部分を中心としつつも、地域や人間との関係の問題とも絡み合っています。現場の「生」の声と経験を通して、そういった関係性の側面についての意識を深めるとともに、狭く限定したテーマに拘泥しない感性を磨くようにしています。

研究所・プロジェクトチーム活動報告

ICTテクノポリス研究所



所長／神谷 幸宏 情報科学部 准教授

次世代ロボット研究所



所長／村上 和人 情報科学部 教授

生涯発達研究所



所長／三山 岳 教育福祉学部 准教授

多文化共生研究所



所長／小池 康弘 外国語学部 教授

人間の尊厳と平和のための人文社会研究所



所長／洲脇 武志 日本文化学部 准教授

"まもるよちいさないのち!" 地域災害弱者対策研究所



所長／清水 宣明 看護学部 教授

地域コミュニティにおける高齢者の介護予防・孤立防止を目的としたニューノーマルな時代の「遊び」開発プロジェクト



リーダー／奥田 隆史 情報科学部 教授

地域貢献から国際展開まで!起業家教育、スタートアップ支援とデータ活用推進

海外スタートアップとの学生起業家教育

2022年11月～12月にかけてアジアのイノベーション中心地、シンガポール国立大学の学生起業家とともに英語によるイノベーション講座を開催しました。英語が得意な県大生に大きなインパクトを与えました。

県大発ベンチャーが農業IoTへ

スタートアップ支援の面では研究所が支援する県大発ベンチャー企業「センスコム」が愛知県の「あいち農業イノベーションプロジェクト」に採択され、愛知県農業総合試験場と農業IoTの実用化に乗り出しました。地域の皆様に実験フィールドもご提供いただき、愛知県の農業に役立つ技術開発を支援して参ります。

次世代ロボット研究所が目指すもの

人とロボットが共生・協調する社会の到来を見据え、人とロボット、あるいは、ロボットとロボットの自律的、協調的な動作の実現を目指しています。インタラクション関連技術、三次元センシング技術等の基盤的要素技術の研究開発を行い、第4次産業革命を支え、技術革新をリードする人材を育成しています。

子どもとプログラミングを学ぶロボットの開発

愛知県立大学情報科学部、教育福祉学部、愛知県立芸術大学美術学部と連携し、子どもと共に学ぶ教育支援ロボットRasbyを開発しました。Rasbyでは、数学などの問題が表示され、子どもの悩んだ状態を推定しながら問題を解くための助言を提供していきます。現在、小中学校での実証実験を計画しています。

生涯にわたる発達の支援に向けて

生涯発達研究所は乳幼児から高齢者まで人間の生涯にわたる発達の支援について、地域と結びついた分野横断的な共同研究の推進を図り、その成果を学内外で活用するとともに、関係する情報を収集し、広く社会に発信することを目的としています。現在、教育福祉学部・看護学部・外国語学部の

教員による共同研究として、愛知県における外国人高齢者支援や、保育所における医療的ケア児の受け入れに関する調査研究を進めています。地域との連携では、愛知県や名古屋市における、学習・生活支援に関する調査、早期発達支援担当者の研修開発研究、生活保護世帯に対する家計管理に関する調査などを受託しました。

多文化共生社会の構築のための学際的研究

多文化共生社会の構築における様々な課題と可能性を様々な視点から研究しています。たとえば外国人住民と医療、福祉、教育、防災、人材育成や雇用などの問題や、情報保障手段のひとつとしてのコミュニティ通訳など、各所員の専門領域から研究を進めていきます。2022年度は「地域における

多文化社会を巡る協同の取り組み」として2回のセミナーを行い、移民・難民の支援や団地での日常的取り組み事例を紹介したほか、シンポジウム「映像人類学と大学教育: 実践事例報告と今後の展望」を開催しました。2023年度は「多文化社会と防災」やコミュニティ通訳の役割などについても取り組んでいきます。

地域に即した人文社会研究

本研究は、人文社会研究の根底にある「人間の尊厳と平和」を、地理学・歴史学・社会学・文学などの学際的アプローチにより、多角的に焦点をあてた新たな地域「誌」の創出や、人々の移動や異文化の接触によって引き起こされる変容に焦点をあてた地域社会の分析などを通じて地域に即した視

点から研究を進めています。現在は四つの研究班を設置し、「三遠南信」、「長久手市・豊田市」、「碧南市・湖西市」、「一宮市」を対象とした研究を行っており、これらの研究成果は年報『人文社会論叢』（愛知県立大学学術リポジトリで公開）にて発表しています。

地域の災害弱者の命を守る

新型コロナ禍が落ち着きを見せる今日此頃ですが、地域ではコロナ感染対策はもちろん、南海トラフ地震や様々な災害に対する不安が高まっています。当研究所は、防災や感染制御、要配慮者の看護や教育の専門家が在籍し、地域からの要請により、講演や教育、調査や実際の対策策定まで、幅広く災

害弱者の命を守るための活動を行っています。その方法論を確立しましたので、今後、さらなる普及を図ります。



遊んだ経験は役に立つ!という時代がやって来たヤァ!ヤァ!ヤァ!

2021年度スタート、略して「遊び」プロジェクト(英略PTA)と称しています。コロナ禍が続いており、介護施設などでの本格的な調査研究はなかなか実施できませんし、活動スペースもありません。そこで高齢化社会における若い頃の過ごし方に目を向けることにしました。“ただ勉強をするだけでな

く、若いときは色々なことにチャレンジしたほうが、特に子どもの頃に遊んだ経験は将来役に立つ”というわけです。具体的には鬼ごっこ等の集団外遊び、高校生のゲーム・プログラミング、大学生のアクティブラーニング、神社仏閣のおみくじの数理分析、森林セラピー、リモートからの高齢者ICT学習支援などを研究し、学術学会で論文発表をしています。



2022年度科研費新規採択一覧／学長特別研究費一覧

科研費新規採択一覧

課題番号	研究種目	部局名	職名	氏名	開始年度	終了年度	研究課題名
22H00639	基盤研究(B)	日本文化学部	教授	中根 千絵	2022	2026	十七世紀尾張藩を中心とした<文化としての武>に関する諸藩対照研究
22K00486	基盤研究(C)	外国語学部	名誉教授	工藤 貴正	2022	2025	台湾白色テロ期の本省籍知識人のアイデンティティ形成に果たした翻訳日本文学の研究
22K01332	基盤研究(C)	外国語学部	教授	中田 晋自	2022	2024	フランス諸都市の都市内分権組織を通じた抽選民主主義と参加型予算の実践に関する研究
22K01286	基盤研究(C)	外国語学部	准教授	杉原 周治	2022	2025	公共放送のオンライン・コンテンツに関する責務と法規制をめぐる日独比較研究
22K00297	基盤研究(C)	日本文化学部	教授	伊藤 伸江	2022	2025	儒形の文学史の再構築にむけた正徹と心敬の文学の総合的研究
22K02237	基盤研究(C)	教育福祉学部	教授	伊藤 稔明	2022	2025	明治期における初等実業教育の台頭と小学校理科の誕生
22K02554	基盤研究(C)	教育福祉学部	准教授	高橋 範行	2022	2025	音楽アプリを用いた聴音学習が相対音感の育成に及ぼす効果に関する実証的研究
22K02687	基盤研究(C)	看護学部	准教授	山田 浩雅	2022	2026	新学習指導要領における精神保健教育を実施する高等学校教員に関する研究
22K11035	基盤研究(C)	看護学部	講師	汲田 明美	2022	2024	難病患者の生活力を育成する看護支援の研究—炎症性腸疾患—
22K10872	基盤研究(C)	看護学部	准教授	石光 美美子	2022	2025	看護師主導の術後せん妄ケア看護教育プログラムの開発
22K10790	基盤研究(C)	看護学部	助教	金澤 美緒	2022	2026	前立腺全摘除後患者とパートナーのレジリエンスを高める看護実践モデルの開発
22K11237	基盤研究(C)	看護学部	助教	伊藤 裕子	2022	2024	敗血症高齢患者におけるサルコペニアの実態と栄養状態、ADL帰結、転帰との関連
22K00973	基盤研究(C)	日本文化学部	准教授	内記 理	2022	2025	西北インド出土仏教碑銘の考古学的研究
22K13117	若手研究	外国語学部	講師	水谷 謙太	2022	2026	束縛的意味を表す日本語の法助動詞相当表現に関する形式意味論的研究
22K17818	若手研究	看護学部	講師	三浦 康平	2022	2024	概日リズムを考慮した血管内皮機能に対する運動の亜急性効果の解明とその応用
22HP5017	研究成果公開促進費(学術図書)	外国語学部	教授	谷口 智子	2022		タキ・オンコイ 踊る病—植民地ペルーにおけるシャーマニズム、鉱山労働、水銀汚染
22HP5155	研究成果公開促進費(学術図書)	教育福祉学部	准教授	葛西 耕介	2022		学校運営と父母参加—対抗する「公共性」と学説の展開
	外国人招へい事業(短期)	教育福祉学部	准教授	大貫 守	2022		授業研究を通じた複言語教育の教授方法に関する研究

学長特別研究費一覧

区分	所属	職名	氏名	研究の名称	グループ構成
科研費採択奨励研究	看護学部 看護学科	教授	黒川 景	コウモリ生態調査への遺伝子解析の導入と生息環境中の病原性微生物・ウイルスの分析	—
チャレンジ研究(一般)	国際戦略室	准教授	桑村 昭	英語による専門科目授業(EMI)を担う非英語圏大学教員の状況に関する日欧比較考察	—
	教育福祉学部 社会福祉学科	准教授	大賀 有記	スピリチュアリティの要素を含めた生物学的ソーシャルワーク実践理論モデルに関する研究	—
	日本文化学部 国語国文学科	教授	福沢 将樹	談話品詞論としての出会いと別れの研究	—
チャレンジ研究(長期)	外国語学部 ヨーロッパ学科	准教授	杉原 周治	サッカーにおけるプロおよびアマチュア選手の活動制限と法的諸問題—コロナ禍におけるスポーツの危機と競技の持続可能性—	—
地域課題研究テーマ②	外国語学部 中国学科	准教授	袁 曉今	愛知県における中国語の言語景観に関する調査及び政策提言	—
学部間連携・産学公連携研究	次世代ロボット研究所	教授	村上 和人	人とロボットの共生・協調のための次世代ロボットに関する研究	【情報科学部】神山齊己/村上和人/小林邦和/鈴木拓央/伊藤正英/入部百合絵/神谷幸宏/佐々木敬泰/ジメネス・フェリックス 【看護学部】佐藤美紀/天木伸子/横山加奈
	情報科学部 情報科学科	准教授	ジメネス・フェリックス	学習者の困惑状態に応じて学習支援を提供する教育支援ロボット(Rapi-bot)の開発	【情報科学部】ジメネス・フェリックス 【教育福祉学部】大貫守 【愛知県立芸術大学 美術学部】春田登紀雄
	人間の尊厳と平和のための人文社会研究所	准教授	本橋 裕美	三河・遠江のモノ・ヒトの往来をめぐる地域研究	【日本文化学部】伊藤伸江/本橋裕美/柴田陽一/服部亜由未 【元興寺文化財研究所】服部光真 【蒲郡市博物館】平野仁也 【碧南市教育委員会文化財課】豆田誠路
	多文化共生研究所	教授	小池 康弘	多文化共生社会構築の課題および社会基盤形成にむけた基礎研究—行政、言語支援、ソーシャルワーク、キャリア形成を中心に—	【外国語学部】小池康弘/アンドレア・カールソン/糸魚川美樹/渡会環/高阪香津美/吉田理加 【教育福祉学部】大賀有記/山本かほり 【看護学部】広瀬会里 【愛知淑徳大学】阿部(董)夢
出版成	教育福祉学部 教育発達学科	教授	山本 理絵	教育と福祉が出会う支援—子ども・教師・専門職がつながる学校・地域をめざして—	【教育福祉学部】山本理絵/田川佳代子/葛西耕介/宇都宮みのり/野田博也/村田一昭/瀬野由衣/三山 岳/稲嶋修一郎/大賀有記/森川夏乃/内田純一/橋本明/高橋範行/大貫守/渡邊かおり 【元教育福祉学部】望月彰 【関西学院大学人間福祉学部】馬場幸子 【生涯発達研究所研究協力者・スクールソーシャルワーカー】水野みち代/酒井多輝子 【客員共同研究員・スクールソーシャルワーカー・スーパーバイザー】早川真理
	外国語学部 英米学科	准教授	三原 穂	ダグラス	—
	外国語学部 ヨーロッパ学科	准教授	糸魚川 美樹	スペイン語の「包括的言語使用(lenguaje inclusivo)」論争にみる言語観と教育機関における「表現ガイドライン」に関する調査	—
長期学外研究	外国語学部 国際関係学科	教授	東 弘子	多言語社会台湾における「新移民」急増の現状と課題: フィールド調査と大学生に対する意識調査	—